令和３年度　古津八幡山弥生の丘展示館 企画展３　展示解説パンフレット

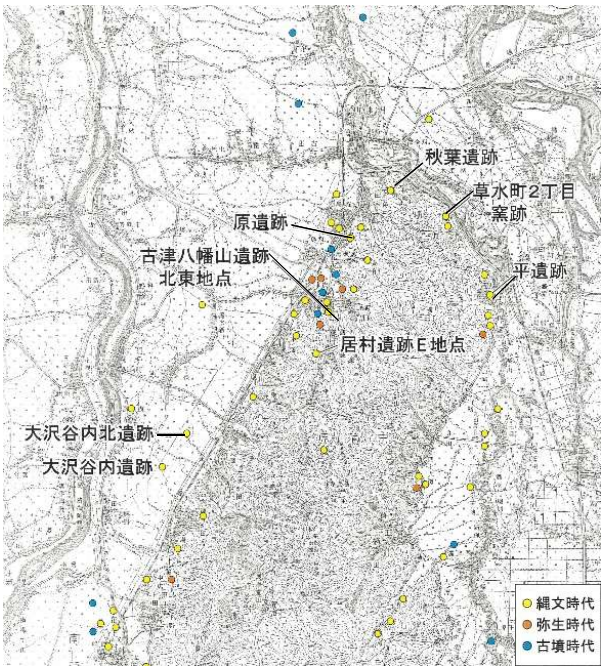
新津丘陵の縄文遺跡　～文様と形のうつり変わり～

令和４年(2022) １.５(水) ～３.27(日)

はじめに

新津丘陵の東西両側には、信濃川と阿賀野川という大河の作った平地が広がり、ここを見下ろす丘陵の平坦面には、縄文時代の遺跡が多く発見されています。このたび、新津丘陵とその周辺の遺跡から出土した縄文土器に焦点を当て、土器の形や文様の変化、そして使われ方などについて紹介いたします。

縄文時代は約 15500 年前に初めて土器が作られ、主食であるドングリ類などの植物採集と、狩猟・漁労による生活が約 13000 年間続きました。縄文時代中期から後期の新津丘陵には、平(ﾀｲﾗ)遺跡・秋葉遺跡という規模の大きな遺跡があり、秋葉遺跡からは火焔型土器の仲間が出土しています。また、丘陵から西へ約１km の縄文時代晩期の大沢谷内(ｵｵｻﾜﾔﾁ)遺跡からは、「石油の町」新津のルーツとも言える天然アスファルトを精製していた土器が発見されています。



地形図は、大日本帝国陸地測量部 昭和９年(1934)刊行

縄文時代の時期区分と土器型式

縄文時代は、草創期・早期・前期・中期・後期・晩期という６期に分けられます。各時期は、土器の変化と出土状態(同時か、新旧か)をもとに、古い土器から新しい土器へと順序正しく並べて（相対編年)、その列を変化の大きなところで区切ったものです。そのため、各時期の長さは同じではありません。縄文土器が初めて作られた約 15500 年前(16500 年説もある)から現代(西暦 2020 年)までを次ページ下段に示しました。約 13000 年続いた縄文時代が、そのうちの 84%もあり、また新津丘陵と周辺部で人々が盛んに活動していた縄文中期から晩期は、縄文時代全体の 24%です。

土器を語る上で重要な手段が「土器型式」です。土器型式とは、形や文様などが共通する土器のまとまりのことで、地域的な広がり(土器分布圏)と一定の時間幅を持っていて、他と区別できます(地方差・年代差)。馬高式や三十稲場式のように、基準となった遺跡名に「式」をつけて表します。土器を作るには、「このような形や文様、整形方法で作らなければならない。」という各地域の中でルールがあったようです。そのために地域内では同じ顔付きの土器が作られ、遠く離れた地域へ運ばれても見つけることができ、人の手から手へと伝わる交通路(交易路)を想定することが可能です。

この相対編年の土器に放射性炭素 14 年代（C14 年代)を当てはめると、地域間でも同じ年代(暦年代)の土器同士を比較することができます。また、土器が年代の基準となることで、一緒に出土した石器や竪穴住居などの遺構がいつ頃のものかも分かります。

縄文時代の時間の呼び方

考古学では、年代や時間を説明するのに「縄文時代・弥生時代・・・」といった「時代」、時代を分けるのに「前期・中期・・・」という「時期」、そして時期のいつ頃かを示すのに、「前葉・中葉・・・」と日常会話ではなじみのない「葉」という用語を使っています。「縄文時代 後期 前葉」というように。中期は「初頭・前葉・中葉・後葉・末葉」と５分割していますが、後期は「初頭～後葉」、晩期は「前葉～後葉」、それすら研究者によって異なります。

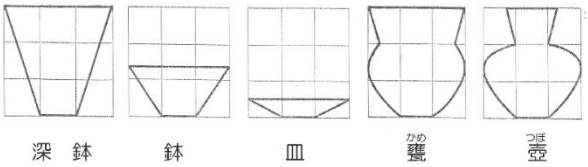
今回のパネル説明では、「初め頃・中頃・終り頃」あるいは「前半・後半」と使いました。

縄文土器の形と用途

最初に作られた縄文土器は、食べ物を煮るための底が丸くて深い鍋(ﾅﾍﾞ)で、深鉢形土器(以下、他の器種も「形土器」を省略)というバケツのような形をしています。土器の基本的な形の種類(器種:ｷｼｭ)は下図の通りですが、日常の煮炊き(ﾆﾀｷ)に使う深鉢は劣化して壊れやすいので、最も多く出土します。

浅鉢や鉢は縄文前期から、壺・蓋(ﾌﾀ)、急須(ｷｭｳｽ)のような形の注口(ﾁｭｳｺｳ)土器は後期から作られます。後期中頃から、シンプルな文様の深鉢・甕(ｶﾒ)などの粗製土器と、ていねいに細やかな文様の付けられた精製土器といった作り分けが意識されます。晩期からは、浅鉢・壺・注口土器・香炉(ｺｳﾛ)形などの精製土器に、皿や台付鉢も加わります。

なお、食べ物を盛るには、木製の器やカゴ、そして漆器(うるし塗りの器)も多く作られていました。

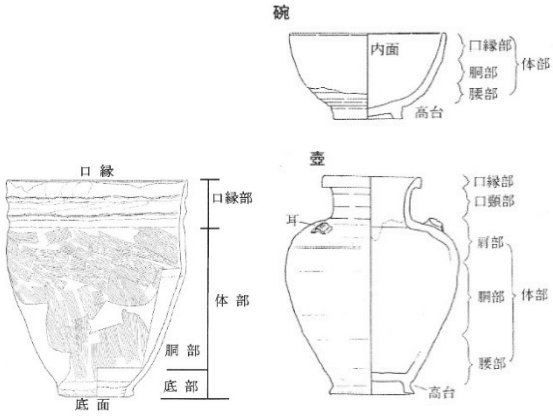


甲野 勇 1976『縄文土器のはなし』学生社

縄文土器の部分の呼び方

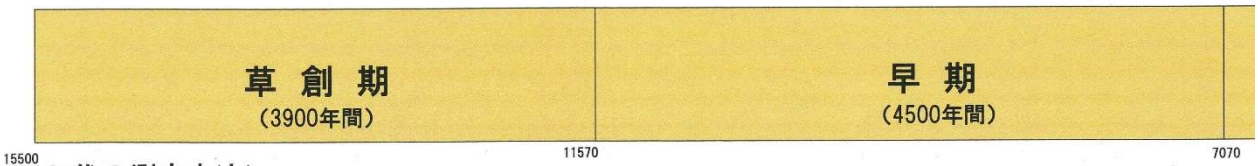
考古学では、土器の部分名称に陶磁器を作る職人や、それを扱う人々が使う用語を参考としています。

土器の形(器種)によって多少の違いがありますが、最も多く使われる用語は、「口縁部・体部（胴部）・底部」です。どの形の土器も、口縁部に文様が多く付けられています。体部には、肩部･胴部・腰部・底部が含まれ、人の体のようです。ただ土器の形によっては、その部分がないもの、境界のはっきりしないものもあります。このような名称は、他の言い換えが困難な考古学の基本用語です。



大沢谷内遺跡の深鉢

田口昭二 1983『美濃焼』ニューサイエンス社



＜年代の測定方法＞

ナベのように使われた土器には、ススやコゲといった炭化物が付いています。炭には特別な炭素（C14）がごくわずかに含まれ、動植物が炭になった時から5730年でそのC14が半分に減ることが分かっています。このしくみによって、土器が今から何年前に使われていたかを知ることができます。

年代は小林謙一 2017『縄紋時代の実年代』ほか参照

縄文土器の作り方

① **素地作り**　・土器を焼くときに割れにくくするため、野山で採取した粘土に砂などの混和材(ｺﾝﾜｻﾞｲ)を混ぜてよく練ります。この状態の粘土を素地(ｷｼﾞ)と言います。ただ、素地で作るヒモは、粘土ヒモと呼びます。

② **形 作 り**　・葉っぱや網代(ｱｼﾞﾛ)などの敷物の上に円板状の素地を置き、粘土ヒモを一段ずつ輪に積んで、目的とする形を作ります。内外面を指やヘラなどで整えます。

③ **文様づけ**　・細い粘土ヒモを貼ったり、線を引いたり、突き刺したり、縄を転がしたりして、文様を付けます。立体的な装飾は、太い粘土ヒモを曲げてくっつけて形にします。

④ **仕 上 げ**　・内面が生乾きの時に、ツルツルの石や貝殻で磨き、水をもれにくくします。土器を薄くするために、削ることもあります。

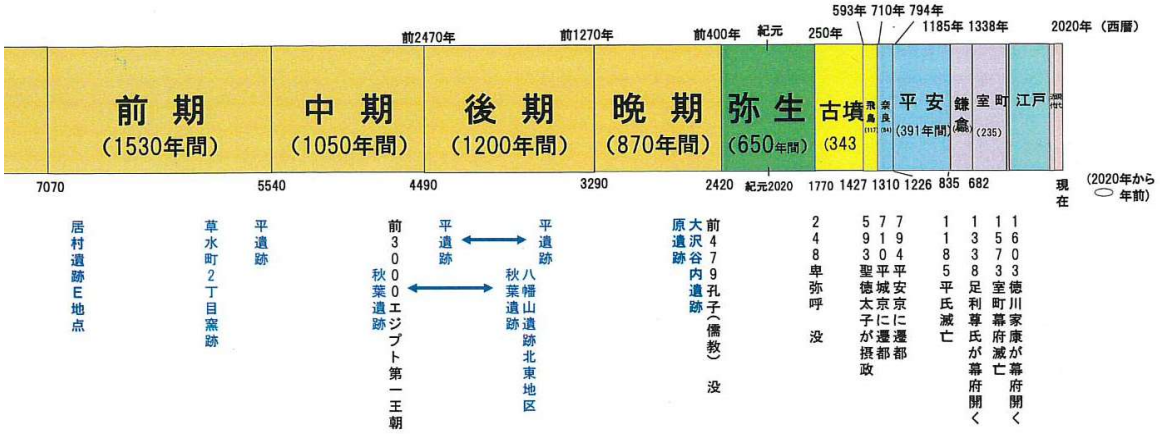
⑤ **焼　　成**　・日陰で良く乾かしてから、500～700 度くらいで野焼きします。焼き上がった土器の素地は胎土(ﾀｲﾄﾞ)と呼び、「胎土分析」のように使います。

縄文土器の文様

「縄文」は、明治 12(1878)年に日本で初めて発掘調査を行った E･S･モースによる大森貝塚の英文での報告書に、Cord mark と書かれた土器の縄目文様を、白井光太郎が「縄紋」と翻訳したものです。長らくは、編物を押し付けた文様と考えられていましたが、昭和６(1931)年に山内清男が撚紐(ﾖﾘﾋﾓ)の回転圧痕であると明らかにしました。縄目の文様は、撚紐を転がした縄文と、撚紐を棒に巻いて転がした撚糸文(ﾖﾘｲﾄﾓﾝ)、それらを押し付けた圧痕文など、時代と地域によってさまざまな種類があります。

縄文土器の文様は、他に細い竹・貝殻・棒状工具(木･骨)などを加工して付けられますが、これらの文様を付ける道具を「原体(ｹﾞﾝﾀｲ)」と呼んでいます。縄文時代を代表する縄文ですが、土器が初めて作られた草創期の前半期には使われていません。後半期の室谷洞窟(阿賀町)の多縄文系土器が最初です。

縄文　　木目状撚糸文　　竹管文　　連続爪形文　　条線文　　網目状撚糸文



縄文前期の遺跡

前期の初め頃は最も温暖な時期で海水面が上がり、関東では埼玉県北部まで海が入り込んで、多くの集落や貝塚が作られました。トチやドングリなどのアク抜きの技術、漆の利用も始まります。ドングリ類は、縄文人の主食です。新潟県内の前期の遺跡は、終わり頃から多くなります。新津丘陵では、居村Ｅ遺跡で前期初めの布目(ﾇﾉﾒ)式が、草水(ｸｿｳｽﾞ)町２丁目窯跡では前期終わり頃の土器が出土しています。口縁部の厚い貼付文様は東北の大木(ﾀﾞｲｷﾞ)6 式。縄文の上に細い結節浮線文（連続爪形文）を付ける真脇(ﾏﾜｷ)式と、細い粘土紐を貼る朝日下層式は北陸方面が中心地の土器です。

草水町２丁目窯跡の土器
（前期終わり頃）

縄文中期の遺跡

全国的に大きな集落が作られるようになり、縄文時代で最も人口の増えた時期です。新潟県の火焔型土器や会津地方の大木(ﾀﾞｲｷﾞ)８ａ式土器、関東の勝坂式土器では、粘土紐を立体的に貼り付けた装飾のハデな文様の土器が好まれました。

新潟平野周辺の中期初め頃は、新保式・新崎(ﾆﾝｻﾞｷ)式という北陸地方と同じ土器が分布し、中頃から終わりにかけては東北南部の大木８ａ 式～大木 10 式土器の分布圏に入ります。阿賀野川下流域では、大木８ａ 式土器を主に、馬高式土器も一緒に使われています。この地域では、新崎式の特徴である細い竹を半分に割った道具が、次の時期の馬高式や大木８ａ 式で２～３本の並走沈線を引くのに使われ、伝統の用具として伝わりました。同じ土器型式の広がりは、山間部でも大きな川沿いを交通路として人が動き、モノが運ばれ、情報も伝わってゆくことを示します。

新潟市内の円筒上層式土器

円筒上層式土器は、東北北部から北海道南部に分布する中期前半の土器で、直線的に立ち上がる円筒のような形からこの型式名が付きました。文様は口縁部に集中します。この土器は日本海側で点々と発見され、新潟県が南限です。村上市樋渡(ﾋﾜﾀｼ)遺跡で円筒上層ｂ式、糸魚川市六反田(ﾛｸﾀﾝﾀﾞ)南遺跡で円筒上層ｄ式が出土しています。

新潟市内では、秋葉遺跡で円筒上層ｄ式、西蒲区大沢遺跡では円筒上層ｂ式・ｃ式が採集されています。秋葉遺跡例は、土器に高温石英という新津丘陵で採取される特殊な砂を含むため、この辺りで作られた土器と分かります。円筒上層式の形や文様の情報を知っている人が来て作ったのでしょう。

円筒上層ｂ式　円筒上層Ｃ式　円筒上層ｄ式
（大沢遺跡）　（秋葉遺跡）

王冠型土器と折衷土器

火焔型土器と王冠型土器を合わせて火炎土器と呼び、馬高式に含まれます。細い竹を割った竹管の内面で、平行線や渦(ｳｽﾞ)・横Ｓ字というような文様を描き、縄文は使いません。口縁にギザギザ（鋸歯状：ｷｮｼﾞｮｳ）の文様とニワトリのトサカのような大突起を持つ火焔型と、口縁部が４つの大きな波状突起の王冠型とがあります。ただし、体部の文様だけでは区別がつきません。新津丘陵を含む阿賀野川下流域は、火焔型が少なく王冠型が多数を占めます。

秋葉遺跡から出土した王冠型類似土器は、体部下半が縄文のため、王冠型土器と大木８ａ 式土器の情報が混じって作られた(折衷:ｾｯﾁｭｳ)土器と考えられます。

王冠型類似土器（秋葉遺跡）

大木８ａ式（新発田市上車野Ｅ遺跡）

火焔型土器（馬高遺跡） 重文＊

王冠型土器（馬高遺跡） 重文＊

：解説リーフレット「馬高式土器とその文化」長岡市馬高縄文館 2019

深鉢を使った痕跡

深鉢を炉(ろ＝いろり)に置いて鍋として使うと、火を受けて外面にススが付きます。日常の食事でシチュー状の食べ物を煮ると土器内面にコゲがつき、写真左の土器のように、口縁から吹きこぼれた状態も見られます。底面から 1/3 ほど上までの側面には炎が強く当たるので、ススも燃えて器面は赤くもろく壊れやすくなります(写真右)。アク抜き(渋味・苦味を取る)のためにドングリやトチを煮ても、内面にコゲは付きません。

新発田市石田遺跡（中期終わり頃）

秋葉遺跡（中期後半）

深鉢の形と使い分け

煮炊き(ﾆﾀｷ)に使う深鉢は、後期中頃を境に形や作り方が大きく変わります。後期初め頃の平遺跡の深鉢は、底径よりも口径がやや大きいくらいのバケツ状ですが、晩期終わり頃の大沢谷内遺跡例では、小さな底部から体部が大きく開く形となり、体部下半へ炎の当たる面積が増え、また薄く作れるようになったことで、熱の伝わりが良くなり、煮る時間が短くなります。

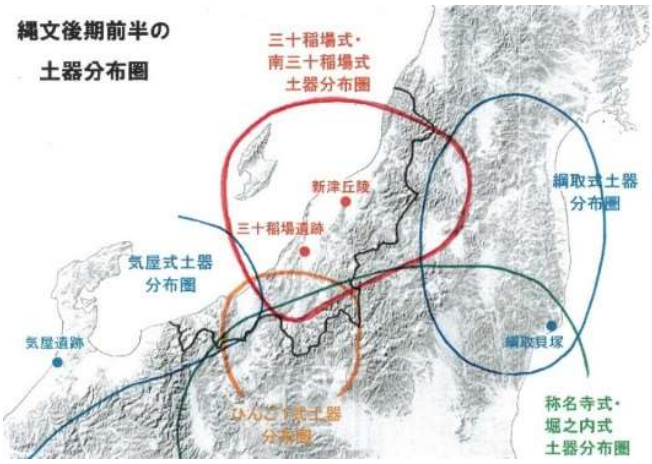
秋葉遺跡（後期初め頃）

大沢谷内遺跡（晩期後半）

東日本の晩期では、大型の粗製深鉢が土器全体の７～８割も占め、これはトチやドングリなどのアク抜き用に、また中型で文様の付けられた半精製の深鉢は日常の料理用と、最近の分析で明らかになりました(阿部・栗島 2021「縄文土器の作り分けと使い分け」)。用途に応じて使い分けられていたようです。

縄文後期の遺跡

中期の終わり頃から後期の初めは、全国的にかなり寒い期間が続き、人々の生活や社会のしくみが大きく変わりました。後期の初め、新潟県内と会津地方では、三十稲場式という全面に刺突の文様をつけ、蓋をのせるために口縁部が外へ開いた特徴的な形の土器が作られました。展示の上ン原(ｳﾜﾝﾊﾟﾗ)遺跡例は古く、馬下稲場(ﾏｵﾛｼｲﾅﾊﾞ)遺跡例は新しい段階です。続く南三十稲場式は沈線文系の土器群で、福島県の綱取Ⅱ式や関東の堀之内１式後半～２式と近い関係にあります。



新津丘陵では、秋葉遺跡と平遺跡が後期前半の大きな規模の集落と予想され、原遺跡は主に後期後半から晩期中頃まで長期にわたって住み続けられた遺跡です。

三十稲場式と綱取Ⅰ式の折衷

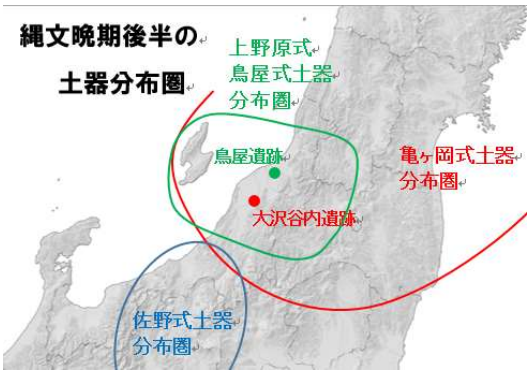
（秋葉遺跡）

三十稲場式(古)　西蒲区 上ン原遺跡

三十稲場式(新)　五泉市馬下稲場遺跡

縄文晩期の遺跡

東北地方全域に広がる亀ヶ岡式土器と、宇宙人のような遮光器(ｼｬｺｳｷ)土偶で知られる亀ヶ岡文化圏の南限が新潟平野です。晩期の初めから終わりまで、大洞Ｂ・BC・C1・C2・A・A′式という岩手県大洞貝塚での発掘調査地点を基にした型式名が付けられています。浅鉢や皿は、細かく丁寧な摩消縄文に文様が付けられ、注口土器や香炉(ｺｳﾛ)形土器といった変わった形も作られます。



新潟県北部では、晩期中頃に上野原(ｳｴﾉﾊﾗ)式、終わり頃に鳥屋(ﾄﾔ)式という地域型式が主体となり、それぞれが大洞C2式、大洞A･A′式と共存します。これらの地域型式の分布圏は、新潟平野を中心に佐渡・会津地方・山形県置賜地方に広がります。

後期までは山間地に多かった遺跡が、晩期になると平野にも作られるようになります。原遺跡は低地を見下ろす新津丘陵の西端に、大沢谷内遺跡は丘陵から西へ１kmの平地の微高地に立地しています。

大洞Ｃ２式(浅鉢)

上野原式(浅鉢)

上野原式（広口壺）

鳥屋２式（甕）

（大沢谷内北遺跡　左３点）

（大沢谷内遺跡）

土器底面の敷物圧痕

縄文土器を作る時に、台に粘土を直接置くと動かせないので、葉っぱや植物を編んだゴザのようなものを敷き、それが土器の底に圧痕(ｱｯｺﾝ)として残ります。敷物には、広葉樹の葉や草・ササなどの植物のほかに、網代(ｱｼﾞﾛ)やスダレ状に繊維を編んだものがあります。網代は、材料を同じ幅でタテとヨコに組み、交互にすくって編みます。スダレ状は、ゴザのようにタテ糸でヨコの繊維をからめる編み方です。底面の敷物圧痕は、土器に粘土を押しつけて型をとると、元の形や編み方を復元できます。

後期前半の底面圧痕（平遺跡）

新潟県での敷物圧痕は、中期初め頃にはスダレ状が多く、中頃から木の葉やササが目立ち、後期からは網代が増えます。ササは、北陸から東北の雪が多く寒い地方の環境に合っているようです。阿賀野川以北の中期終わり頃では、敷物の圧痕をわざわざナデ消すなど、地域によって特徴があります。

土器実測図の仕組みと描き方

発掘調査報告書でよく目にする土器の実測図は、土器を作った技術（成形・整形・施文）や使った状態（使用痕・破損）などの情報を記録として保存し、また実物を直接見られない人に伝えることを目的とします。

実測図はスケッチや復元図ではなく、きちんと定規やディバイダーで長さを測り、形をマコで写し取った図面です。写真・拓本との３点セットが望ましく、それぞれの表現法の短所をカバーし合います。実測図には約束ごとがあり、土器を真上から見て、右下 1/4（時計の３時から６時の間）を取り去った状態を正面から見ます。中軸線の左側に外面、右側に内面と断面を表わし、断面の厚さはキャリパーやディバイダーで測ります。

外形図ができてから、輪積み痕・整形痕や文様を書き込み、ススやコゲ、被熱やハジケ、破損などの使用痕があれば図に範囲を書き込みます。その後に、各部位や全体がどのくらい残っているか、計測値と出土情報などを文字で記入しておきます。特に容積（どのくらいの水が入るか）や色は、図を見ても分からないので記載が必要です。色は、「標準土色帳」という土の色見本をほぼ全国の発掘調査で使っているため、「10YR 6/4 にぶい黄橙色」のように書けば共通認識ができます。

（参考：石川日出志 2001「土器の実測とは何か」『考古学において遺物の実測とは何か』考古学技術研究会）

秋葉遺跡（あきは）　（縄文時代 中期初め～後期初め頃）

秋葉山の公園へ登る緩い斜面の住宅地で、 平成 10（1998）年から 13 回の発掘調査が行われています。 いずれも宅地開発や駐車場の造成に伴う小規模な調査がほとんどです。

遺跡の標高は 20～22m、平地との高低差は 15m前後です。遺跡の中心部は丘陵の平坦面ですが、傾斜地の調査では、深いところで地表から 120 ㎝も下から土器が出土しています。これまでの調査で、竪穴住居と炉跡、掘立柱建物のほか、多くの柱穴や土坑(色々な用途の穴)が見つかっています。土器を見ると、中期の初めから後期の初めまで途切れることなく出土しており、長期に渡って住み続けられた集落ということがわかります。河川や山林が近くにあり、よほど住みやすかったのでしょう。

平遺跡（たいら）　（縄文時代 中期初め頃・後期前半）

阿賀野川や早出川が作った平野部を見下ろし、西から東へ向かってゆるく傾斜する台地の先端に位置する中期初めと後期前半の集落跡です。標高は 15～21m、平地との高低差が 10m ほどあります。遺跡の範囲は、南北 70m、東西 60m ほどと推定され、現在は宅地と畑地になっています。

昭和 56（1981）年と令和 2（2020）年に発掘調査が行われ、中期初めと後期初め頃の竪穴住居が各１棟、中期初め頃の小型土器を埋めた土坑などが発見されています。後期の竪穴住居は斜面を段状に整地して作られ、直径 3.6×4.2m のほぼ円形です。石や、粘土を焼いて作った漁網の重り、ハート形土偶の顔も出土しています。

中期初めの土器は、北陸系の新保(ｼﾝﾎﾞ)式と新崎(ﾆﾝｻﾞｷ)式が主体で、細い竹を割った内面で、カマボコ状の隆帯(竹管文)や連続爪形文を描く文様が基本です。その後の馬高式、東北系の大木(ﾀﾞｲｷﾞ)８a 式と、新潟平野ではこの割竹を使った技法が引き継がれていきます。後期前半は、刺突文の深鉢と蓋形土器が特徴の三十稲場式、そして沈線文様が主体の南三十稲場式の土器が多く出土しました。

大沢谷内遺跡（おおさわやち）　（縄文時代 晩期後半）

新津丘陵から西へ１km の位置で、国道 403 号線バイパス工事の際に発見された晩期後半の遺跡です。25 次に及ぶ発掘調査が行われました。北へ 100mに位置する大沢谷内北遺跡も一連の遺跡と考えられます。信濃川は、ここから 1.5 km 西を流れています。現在の水田面の標高は４mですが、そこから約１m下で縄文時代の生活面を発見しました。湿地の中の微高地に営まれたムラだったようです。ただ、新潟平野は少しずつ沈み続けているので、当時はもっと標高が高かったのでしょう。

この遺跡は、新津丘陵の山裾で採取した天然アスファルトを運んできて不純物を除去し、物々交換用の製品に仕上げる工房だったようです。また、舟で運び出す港の役割も持ち合わせた、一時滞在のムラと考えられています。一年を通して生活するのに必要な石器の種類や量が少ないこと、土器は煮炊きに使う粗製深鉢が大多数で他の器種が少ないこと、マツリの道具がないことなどがその理由です。